

春秋中期の政治史（晋悼公の時代） 及び春秋公羊傳・穀梁傳通釋

岩 間 秀 幸
瀧 本 可 紀

Abstract

The victory over Chu in the battle field of Yanling did not lead to radical change in the map of China. It was only narrow victory. As time went by, it became clear that the victory was hardly won. But for the time being, the supremacy of Jin had been restored by Prince Dao.

In order to stabilise the supremacy, Jin needed to get Zheng to its side. Zheng hitherto had carried out two borders policy. They waited for the army of Chu or Jin carrying Jade and Sacrificial beast. Thus, they barely got out of a difficult situation. They took uncertain attitude toward Jin in this way.

Jin attacked Zheng with large army to break through the state of affairs.

I 夏目漱石と鄢陵の戦

夏目漱石は熊本の第五高等学校の教授の時、英国に2年間留学して帰国後、東京大学で明治36年9月より38年6月まで「英文学概説」という講義を行っている。それは漱石全集（第14巻岩波1995年）の文字論に記載されている。無論、この講義の題目からして、その内容が英文学に関するものである事は当然であるが、第八章間隔論の中に「鄢陵の戦」が出てくるのである。

この戦は春秋時代晋楚の戦の中で最大の激戦であり、又最後の決戦でもあった。漱石の左伝の引用文はこの戦の開戦直前の情景で、楚の共王が巢車に登り、敵方晋からの亡命者と一緒に晋側の軍の動きを観察し、その亡命者から解説を受けている場面である。“鄢陵の戦は左氏の文中白眉なるものとして、読書子の推賞措かざる所なり。文に曰く「楚子登巢車以望晋軍。子重使大宰伯州犁侍于王後。王曰。騁而左右。何也。曰召軍吏也。皆聚于中軍矣。曰合謀也。張幕矣。曰虔卜於先君也。徹幕矣。曰將発命也。甚囂且塵上矣。曰將塞井夷竈而為行也。皆乘矣。左右執兵而下矣。曰聽誓也。戦乎。曰未可知也。乘而左右皆下矣。曰戦禱也。」”

この漢文を漱石は学生を前にしてどのように読んだかは解らないが、恐らく訓読で読み下したであろう。現在では大学でも古典中国語は現代中国語（マンダリン）で読まれている。それは東京の倉石、京

都の吉川両先生の尽力の御蔭で、この世界もグローバル化したと言える。だが、ここでは漱石先生時代の読み方を踏襲する。楚子、巢車に登りて以て晋軍を望む。楚子とは楚国の共王の事で、子とあるのは子爵。楚は大国となり、周王朝に爵位の昇格を願い出たが拒否された。そこで、それならばと自ら王位を称するようになった。それ故、楚及びその従属国は楚の国君を楚王と言うが、周王朝の諸侯国は絶対に楚王とは呼ばない。‘春秋’は魯の歴史書が元であるため全て楚子で通している。なお楚以降に歴史の舞台に登場する‘呉’や‘越’もそれぞれ自らを‘呉王夫差’とか‘越王勾踐’と称している。

巢車とは車の中に高い柱を立て、それに昇降できる展望台を付けて相手側の様子を探るための車輛である。それは恰も鳥の巢が柱の上にある様に見えるので、この名がつけられている。子重 大宰伯州犁^りを王の後に侍らす。王曰く、騁^はせて左右するは何ぞや。曰く、軍吏を召する也。皆中軍に聚^{あつま}れり。曰く、合して謀するなり。幕を張れり。曰く、度^{つし}みて先君に卜する也。楚の令尹^{れいいん}（首相）である子重が晋からの亡命者、伯州犁を楚共王の後に侍らせた。共王が言う。“兵達が車を左右に走らせているのは何をしているところなのか。”伯州犁答える。“それは軍吏、即ち指揮官達を召集しているのです。”“皆が左右の軍から中軍に集まったぞ。”“それは集まって作戦を立てているのです。”“幕を張ったぞ。”“それは謹んで先君に対し戦の勝敗を占っているのです。”幕を徹する也。曰く、將に命を発せんとする也。甚だ囂^{さわが}しく且塵上れり。曰く、將に井を塞ぎ竈^{かまど たいらか}を夷にし而して行を為さんとす。皆乗れり。左右兵を執りて下り。曰く、誓を聴く也。“幕を徹したぞ。”“それは命令を発しようとしているのです。”“ひどく騒がしく、且つ塵が上っている。”“それは井戸を埋め、かまどを壊し地面を平らにして隊列を組んでいるのです。”“皆車に乗った。左右に乗っていた甲士が武器を持って下車した。”“それは誓を聴くためです。”戦はんか。曰く、未だ知る可からず。乗りて左右皆下れり。曰く、戦の禱^{いのり}なり。“戦が始まるのか。”“まだわかりません。”“乗ったと思ったら又左右の甲士が下りたぞ。”“それは戦を前にして祈りを捧げているのです。”

この文中に指揮官達が中軍に召集されるとあるが、晋の軍隊は中、上、下、新軍の4軍で編成され、中軍が最高位でその將は同時に行政官のトップでもある。この時は欒書である。兵車には車を御する、即ち操縦する者が中央に乗り、左側には弓矢の武器を持った兵車の指揮者が乗り、右側に乗っている者は戈を持ち左側の上位者を守る役目を果している。これら3人は全て大夫である。なお日本でも武士の事を“弓矢取る身”というが、それは上士の事で馬に乗って戦う身分である。春秋時代の中国では兵車に乗って戦うのは大夫である。騎馬の習慣は戦国時代になってからである。因に、楚の三軍は中、左、右軍となっており、晋の三軍とは呼称が異っている。

漱石はこの部分の漢文を‘Ivanhoe’と比較して述べている。以上は「鄢陵の戦」の余話として書いたものである。

II 晋国内の勢力の変遷

鄢陵の戦で晋の厲公は勝利し、その勢に乗じて晋の最大の世族、郤氏^{げき}を族滅したが、逆に身の危険を

感じた欒書と荀偃によって厲公は殺されることになった。そこで欒書は周の都洛陽にいた孫周（文公重耳の子孫）を迎えに、荀罃と士魴を送った。その結果晋の悼公が登場した。悼公は即位の席で「逐不臣者七人」不臣の者七人を逐う、と述べた。彼らは当然厲公の取り巻きであった連中であろう。胥童は殺され、長魚矯は狄に出奔しているの、残っているのは夷羊五達である。厲公の関係者は残らず処分して、朝廷内に前君の影響が残らない様にした。それは君主厲公を殺した事の善悪を論じ始めると、收拾がつかない事を悼公が知っていたからであろう。続いて彼は晋国内の多方面の改良を行い、政治的安定を求めるために貴族達のバランスを考えた。

ここで、晋楚の大決戦である城濮の戦での軍制と鄢陵の戦での軍制を比べて見よう。

城濮の戦 BC 632

先軫—中軍将	卻溱—中軍佐	荀林父—御者 魏犇—車右
狐毛—上軍将	狐偃—上軍佐	
欒枝—下軍将	胥臣—下軍佐	

(下線部は文公重耳の亡命時の部下)

鄢陵の戦 BC 575

欒書—中軍将
 卻錡—上軍将
 韓厥—下軍将
 荀罃—留守
 欒黶—魯に求兵
 士燮—中軍佐
 荀偃—上軍佐
 卻至—新軍佐
 卻犇—衛、齊両国に求兵

城濮の戦では、軍司令官の6卿のうち4名が文公の部下で、19年間の亡命期に文公と生死を共にした人達である。残りの欒枝は、その子孫の欒書が鄢陵の戦で中軍の将、その息子欒黶が国君の代理で魯に出兵を要請している「乞師」。卻溱は、その子孫の卻錡は上軍の将、卻至は新軍の佐、卻犇は衛齊両国に乞師。城濮の戦の時晋の国君文公の兵車の御者、荀林父の子孫は上軍の佐の荀偃と荀罃である。荀罃は邲の戦で捕えられたが、晋に捕えられている楚の公子と連尹襄老の死体との交換の話が晋側から持ち出された。荀罃の父荀首が中軍の佐であったため、それは比較的スムーズに実現した。かくて、連尹襄老の死体が戻ってきたことにより申公巫臣と夏姫の晋への出国及び知罃の晋への復帰が実現した。知罃は鄢陵の戦で捕えられた際、楚の共王を初め令尹の子重、司馬の子反と知り合いになっている筈で、互いに戦いにくだらうと留守に回っている。いかにも欒書の配慮が感じられる。車右（同乗の文公のボディガード）の魏犇の子孫は鄢陵の戦にはその名がない。なおこの両者は国君を直接保護するので、卿に次ぐ地位を得ている。荀林父は後すぐに晋の歩兵部隊中行の将になる。それ故、この系統は中行氏を名乗る。

城濮の戦から半世紀余り後の鄢陵の戦では文公の子孫は卿の中に一人もいない。韓厥は趙盾の支援を受けて河曲の戦で司馬になり、鞍の戦で齊の頃公を逮捕寸前まで追いつめて取り逃した。又鄢陵の戦の

後、晋の厲公が三郤を殺し、その後欒書と荀偃が厲公を捕えた。その際欒書達が韓厥を召そうとしたが、彼はそれを断った。悼公の代になり欒書が死亡し、韓厥が代って執政となった。韓家では戦国末期の韓非子が有名であるが、韓家の存続には特に関係がない。司馬遷は史記の韓世家の中で次のように言っている。韓氏は晋国に対して大した功績は立てていないが、亡びかけた趙家を復活させた。晋の景公が病気になる時、韓厥はそれは晋国の為に大業を建てた趙衰の祭祀を絶ったことに対する祟りだと言って、趙家の復活を実現させた。彼の陰徳（人知れずの善行）の御蔭で韓氏は三晋の一つとして、戦国時代の末まで続いている。

この時代は、公家、即ち国君と力が増大して来た卿大夫との争い、又卿大夫同士の争いが激化していく時代であった。

Ⅲ 韓厥の陰徳

1 左伝の記述（魯成公8年）

晋成公の公女で趙朔の妻である趙荘姫は夫が早く死し、夫の叔父である趙嬰と通じていた。それを知った趙嬰の兄趙同と趙括は彼を齊国へ追放した。趙同、趙括と趙嬰との間にはこれ以外にも問題があったと思われる。邲の戦の時、趙括と趙嬰は中軍の大夫、荀首と趙同が下軍の大夫である。趙同と趙括は中軍佐の先穀の主戦論に賛同し、趙括、趙同曰く“師を率いてここに来たのは唯、敵を求めて攻めるためだ。敵に勝って鄭を属国にできれば他に何を望もう。必ず先穀に従うべきだ。”楚を攻撃するかどうかの会議で趙括と趙同は激的な主戦論を唱えているのに反し、趙嬰は一言も発していない。むしろ彼は自分の部下を使い前以て舟を黄河の岸に準備させ、敗れた時、最初に渡ることが出来た。（左伝宣公12年）この事からも趙同、趙括と趙嬰とは反りが合わなかったことが伺える。

趙嬰の追放を怒った趙荘姫は弟の晋景公に、彼等二人が謀叛を起そうとしていると中傷し、加えて、欒書も郤克もその事を立証していると言った。それを聞いて景公は趙同と趙括を討つよう命じた。そして趙家の封地は晋の公族である祁奚きけいに与えられた。子供の趙武は母親の趙荘姫に付いて公室、即ち晋公の宮殿で育てられることになった。そこで韓厥は晋公に進言した。“晋の文公重耳の側近であった趙衰の勲功、その子趙盾の忠誠の跡を継ぐ者がいなくなると、誰もがそれを恐れて善を行おうとしなくなるでしょう。”それを聞いて晋公は趙武を趙家の跡継ぎにし、取り上げた封地を趙武に返してやった。

2 史記「趙世家」の記述

司馬遷は史記を書くに当り、書籍だけでなく中国各地を歩き、各所の伝聞や資料を集めている。それ故、同一事件でも春秋左氏伝と史記とで内容の異なるものがある。この件もその一例で、史記の趙世家では次の様になっている。

晋の景公3年、屠岸賈とがんかは景公の前の国君靈公に寵愛され、景公の時に司寇こう（刑を司どる官）になった。彼は自分を寵愛してくれた靈公が趙族の一人に殺された事で、何とか趙氏を罪に問おうとした。そこで

趙家の宗主趙盾がその元凶だと決めつけ、諸將に呼びかけた。“靈公が殺された時、趙盾はその場に居なくても、やはり彼は最高の責任者である。それにもかかわらずその子孫が堂々と朝廷に仕えている。このようなことで罪人をどうして処罰できようか。皆で趙氏を族滅しよう。”韓厥はそれに対し、“趙盾はその時その場には居なかった。又先君も彼に罰を加えられなかった。それなのに勝手に趙氏一族を全員誅殺、即ち族滅するのは乱臣であり、しかも君主が知らないうちにそれを行おうとするのは君主を無視する事になる。”と反論した。しかし、屠岸賈は聞く耳を持たなかった。無論、彼一人の力でこのような大事件を引き起こすことは出来る筈がない。この裏には君主権を強化したいと思う晋景公の意志が働いているに違いない。晋の史官が「趙盾弑其君」趙盾其の君を弑す。「以示於朝」以て朝に示す。趙盾が君主を殺したと書いて朝廷に張り出した。趙盾は自分は手を下していないと抗弁したが受け入れられず、已む無く黙ってしまった。それも屠岸賈を勇気づけたに違いない。

韓厥はこの事を趙朔に知らせ、至急逃げるように告げた。趙朔は“あなたが趙氏の祀を絶やさぬ様にして下さるなら、私は死んでも恨みません。”と言った。韓厥は承知し、それからは病と称して外出を止めた。屠岸賈は景公の許しを請わず勝手に諸將と共に趙氏を攻め、趙朔、趙同、趙括、趙嬰を殺し、その一族を皆殺しにした。

趙朔の妻は先君成公の公女で、腹に子供を宿しており、急いで宮殿に隠れた。趙朔の食客に公孫杵臼しよきゅうという者がいた。彼は趙朔の友人の程嬰に、どうして殉死しないのか、と問うた。程嬰は答えた。“趙朔の妻の腹には子供がいる。もし幸いに男の子ならばその子を奉じて育て、女の子なら私はゆっくり死ぬだけだ。”しばらくして趙朔の妻は男の子を生んだ。それを知って屠岸賈は宮中を探した。夫人は子供を自分の袴の中に隠し、祈って言った。“趙氏一族が絶えるべきものならお前は泣き声を出さない。もし絶えるべきものでないなら声を出さない様に。”搜索の際、子供は思いもかけず声を立てなかった。何とか難を逃れて程嬰は公孫杵臼に言った。“今回は捉まらなかったが、後に又必ず探しに来るだろう。どうしたものか。”公孫杵臼が言った。“この孤児を立派に育て上げるのと自分が死ぬのとどちらが難しいか。”程嬰言う“「死易、立孤難耳」それは死ぬ方が易しく孤児を立派に育て上げる方が難しいに決っている。”“「趙氏先君遇子厚、子彊為其難者、吾為其易者、請先死」趙氏の先君、子（あなた）を厚く遇す。子彊（=強）いて其の難なる者を為せ。吾其の易なる者を為さん。請う先に死せん。今は亡き趙朔さんは君を厚く待遇してくれた。君は大変だろうが其の難しい方をやってくれ。私は易しい方をやろう。どうか先に死なせてくれ。”

二人は策を講じた。別人の嬰兒を探し、美しい幼児衣を着せ、之を背負い山中に隠れた。その後、程嬰一人が山中から出て来て將軍達に偽って言った。“私はしががない者で、趙の孤児を立派に養育して世に立たせることができない。誰か私に千金を恵んでくれれば、趙氏の子供の居場所を教えよう。”諸將は皆喜んでこれを受入れ、軍を出して程嬰の後をつけ、公孫杵臼を攻めた。杵臼も一芝居打った。“つまらない男（小人）だなお前は、程嬰。昔趙氏が難に会った時死ぬことも出来ず、私と謀って趙氏の孤児を隠したのに、今度は私をも売った。この子を売ることなど出来ない。”そして子供を抱えて叫んだ。“天よ、天よ、趙氏の孤児に何の罪があるのか。どうか生かしてやってくれ。私、杵臼を殺すだけで充

分でしょう。”諸将はそれを許さず、その場で杵臼と孤児を殺した。諸将は趙氏の孤児が確実に死んだと思ひ、皆喜んだ。だが、実際には本当の趙氏の孤児はまだ生きており、程嬰はやっとの思ひで孤児と一緒に山中に隠れることが出来た。

その後15年が過ぎた。晋景公は病気になり、占うと“大業の後を断たれたものが祟りを為す”と出た。景公がこの事を韓厥に問うと、彼は趙孤が現存していることを知っていて言った。“この晋国で大業の後、祀が絶えたのは趙氏でしょうか。昔から先代の成公に至るまで世々功を立て祀が絶えたことはありませんでした。今、吾が君になって初めて趙一族が滅亡しました。国人はこれを悲しんでいます。だから占に表われたのでしょう。この事をよく考えて対処していただきたい。「景公問曰、趙尚有後子孫乎」景公問いて曰く、趙に尚後の子孫有りや。”子孫が残っているかとの景公の問いに、韓厥は事実を包み隠さず景公に話した。そこで、景公は韓厥と謀り、趙孤を擁立しようと彼を呼び寄せ、宮中に隠した。

諸将は景公の病を知り見舞に来た。景公は韓厥の兵を用いて諸将を脅して趙孤に会わせた。趙孤は名を武と言った。諸将は迫られて已を得ず言った。“昔、趙の族滅は屠岸賈がやった事です。景公の病が無かったら、我々は以前から趙氏の後を立てるようお願いするつもりでした。今や、君命があり、これこそ我々臣下の願いでもあります。”そこで趙武、程嬰を召し、普く諸将に拝礼させた。そして逆に、程嬰、趙武と共に屠岸賈を攻め、その一族を滅した。景公は趙武に元の封地を返した。晋の献公が死に、驪姫とその子が呂克と丕鄭に殺され、公子重耳を迎え入れようとして屠岸夷を送った、と「国語、晋語二」にある。屠岸家は晋の卿になる次の段階の家柄のように思われる。屠岸賈は卿を狙っていたであろう。

趙武は二十才になり、加冠の礼が行われて成人となった。「国語、晋語六」の中に次の様な記述が見られる。趙武は成人になる、即ち元服したので、卿達に挨拶まわりをした。最初に正卿である欒書、続いて荀庚、范燮、郤錡、韓厥、知罃、郤犇、郤至の所へ行つた。趙武の父趙朔は存命の時、下軍の将で欒書はその佐であった。彼は趙武を見てその事を思い出したに違いない。老人の荀庚からは特別な言葉は無かったが、范燮、韓厥、知罃からは激励の言葉を受けた。三郤からは「吾安容子」吾いづくんぞ子を容られんや。私はどうして貴方を受け入れることができようか、という排斥の言を受けた。

その後、程嬰は諸大夫に別れを告げ、趙武に言った。“昔、趙家で難があった時、皆はよくその難に殉じた。私は死ねなかったわけではなく、趙氏の後を立てようと思って死ななかったのです。今や、趙武は当主で成人となり、元の位にも復歸しました。私は黄泉に下つて趙盾と公孫杵臼にこの事を報告したいと思ひます。”趙武は泣いて頓首し嘆願した。“私は一身を捧げて死ぬまで貴方に報いようと願っているのに、貴方は無理にも私を捨てて死んでしまうのですか。”程嬰は答えた。“駄目です。杵臼は私が事を成し遂げると信じて、私より先に死んだのです。今、私が報告しなければ、きっと彼は私が事を成就できなかったと思うでしょう。”そう言つて彼は命を絶つた。趙武は3年間喪服を着、領邑内に彼の祠を作り春秋に之を祭り、世世絶やさなかった。

趙氏が復位して11年。晋厲公は其の大夫三郤を殺し、欒書はそれが自分に及ぶことを恐れて其の君厲公を殺した。襄公の曾孫、周を立てて悼公とした。この時趙武は卿となった。晋はこれより大夫の力

が序々に強くなってきた。

史記以外にも、司馬遷より少し後に出た王充による記述の中にも、これと同じようなものがある。彼は後漢の光武帝の建武3年（西暦27年）に生まれた。日本の後醍醐天皇が行った建武の中興は、前漢が滅び光武帝が後漢を再興したのに倣い、日本にも天皇親政を再現しようとして、彼は1300年後にこの建武の年号を採用した。王充は「論衡の吉驗第九」の中で、史記よりもはるかに簡単ではあるが、同一の事を述べている。「屠岸賈、難を為し趙盾の子趙朔を誅す。其の妻に遺腹（父が死んだ後に残された胎児）有り。岸賈聞くに及び宮に索む。母、兒を袴中に置き、祈って言う。趙氏宗滅（一族全員の滅亡、宗は一族）か。汝泣くべし。若し不滅なら汝声無し。お前は泣声を立てるな。之を索るに及び、終りに泣かず。遂に脱して活を得。程嬰は子供が生きることができたので、又捜され捕えられるのを恐れ、すぐに生まれた子を背負って山中に隠れた。景公の時に至り韓厥この事を景公に言う。景公、韓厥と共に趙孤を立て趙氏の祀を続けさせた。是が趙文子、武である。」

王充は家が貧しく、書籍を買う金が無かったので本屋で立ち読みをし、本の内容を記憶したと言われている。記憶に頼って書いたので、史記と比べて簡単なものになったのかも知れない。

IV 夏華族と戎狄との関係

歴史書にはよく公子某、又は公孫某と記載されている。周王朝では元来、天子は諸侯に封土を与えて国を立てさせ、諸侯は卿大夫けいに封土を与えて家を立てさせる。卿は分家を作り、大夫も又小宗を作る。卿大夫とあるが、身分的には大夫だけで、卿はその都度、大夫の中から天子又は諸侯から指名されるものである。世に世卿といって、代々卿になっている一族もある。例えば、齊国の国氏と高氏である。だが、この二家は命卿といって天子から命じられて卿となったもので、国君がどうすることも出来ない卿である。大国には三卿があり、二卿は命卿で一人だけが国君の命ずる卿である。それが齊桓公の管仲で、あくまでも下卿である。

周王朝を支えていた制度のもう一つは宗法制である。これは血縁組織で、同一の先祖から続いてきた一族である。その嫡長子を継いだ系統は大宗で、それから分れたものが小宗である。周王朝、特に創始者の文王、武王の子孫が中原の諸侯国の君主になっており、その国内でもその国君の血縁者が主として卿大夫になっている。それ故、天下全体が分封制と宗族制で出来上っていて、周の天子が天下の共主、即ち共通の主である。だが、この様な状況は周が東遷して都を洛陽に移して以来、崩れていったのは明らかである。

公家は一国の国君とその子及び孫までである。国君の子供は公子某、孫は公孫某と名乗ることが出来る。先君の子や孫は公家の中に入らず、国君の兄弟も公家の一員ではない。

晋楚の覇権争いが終末期を迎える時になり、晋国は狄戎を兼併融和する活動を強化し始めた。

周以前からずっと夏華族と戎狄は雑居し、和戦が定まらなかった。西周が亡びた原因の一部に犬戎の働きがあった。周文化を受け入れている地区を夏と称し、その地の文化の高い人又は族を華と称し、結

合して夏華と言う。その人々が住む中原諸侯国を中国と称した。文化が低く周の礼を守らない人々を蛮夷戎狄と言った。夏華族は夏、商（殷）、西周の時代に形成された。

第二段階の春秋時代に夏華族の大国を代表する齊の桓公は尊王攘夷の旗幟^しを掲げて夷狄と戦い、夏華文明を擁護し拡大した。本来、四夷に属していた秦や楚は西方や南方で勢力を挙げ、一方では着実に中原の夏華文明を吸収し、遂には中原諸国、特に晋と覇を競うようになった。次の戦国時代に入ると、秦楚は夏華族と融合して中原各国と同一視されるようになった。

V 晋国と戎狄

1 晋と狄

晋楚の軍が鄢陵の地で遇い、中軍の佐、士燮は戦を欲しなかった。卻至曰く：韓の戦で恵公は秦の捕虜になり凱旋できなかった。狄との戦である箕^きの戦で中軍の将先軫^{しん}は戦死し、国君に復命できなかった。邲の戦の時、荀林父は一戦で負け、二戦はしなかった。この3つは晋の恥である。ここで楚との戦を避けると恥を増す事になる。（左伝成公16年）この第2の箕の戦は白狄との激戦で、第1の秦との戦、第3の楚との戦と並べて述べている。次いで范文子（士燮で士会の子、范は封地の名）は「文子曰、吾先君之亟战也有故」我が先君がしばしば戦ったのには理由があった。「秦狄齐楚皆彊、不盡力、子孫将弱」秦狄齐楚皆強し、我々が全力を尽して戦わねば、我々の子孫は弱体化するであろう。「今三疆服矣、敵楚而已」今や三強は我らに服し、対抗しているのは楚のみである、と言った。彼は狄を春秋期の大国、秦齐楚と同列に見ている。両者とも狄を重視しているのである。

晋は深山に在り、戎狄が隣りに居るという状況で、戎狄との関係をどうするかが晋国の重要な政策の一つであった。春秋期、晋国の対戎狄政策は二段階に分けられる。第1は狄族に対するもので、主として戦争という手段で行われた。第2は戎族に対するもので、これには友好的な交流政策がとられた。

狄族の活動範囲は現在の陝西、山西、河北一帯で、春秋の初期、その勢力は極めて大であった。常に中原の鄭燕^{えん}齊等の国々に侵入し、邢や衛は亡びた。狄人は白狄、赤狄、長狄に三つに分けられた。白狄と赤狄は彼等が好んで着る物の色からつけられた名称で、長狄は彼等の身長が高いことでつけられている。しかし、それらはいずれも中原諸国の夏華人がつけたもので、彼等自身の呼び方ではない。

晋国の長期に亘る対狄闘争に際して、文公は三軍の他に3つの歩兵部隊を創った。これを三行と称し、中行、右行、左行とした。晋の大宗族荀氏は後に中行氏と知氏に分れるが、荀林父が中行の将になったため中行氏となった。知氏の知は食邑の名である。左伝喜公28年、城濮の戦の後、「晋侯作三行以禦狄」晋侯（文公）三行を作り以て狄を禦ぐ、とある。

軍はその字から解るように車から成っている。即ち機甲師団である。機甲師団は華北華中の大平原、ヨーロッパロシアや北滿ノモンハンの大平原のような所では大いに威力を発揮する。だが、山岳地帯になると行動が儘ならない。そこで戎狄が多く住む山岳地帯用に歩兵軍団を創設したのである。その後、中国大陸全体が戦場になると、南方では水軍、西北では騎兵と兵種も増えて来た。しかし、陸上戦では

歩兵部隊が主力軍になる事は中国だけでなく全世界で、20世紀まで続いている。我が帝国陸軍でも散兵線の華と散る歩兵が軍の主力であった。陸軍の場合、兵科（兵の種類）は憲兵、歩兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵（logistics）航空の七兵科で、「歩兵」は本科と呼び本流扱いであった。砲兵将校であった山本七平氏が「日本はなぜ敗れるのか」（角川）の中（p.55）で“軍人同士でも本科将校が特科将校を馬鹿にして優越感を持っている”と書いている。歩兵以外の六科は「特科」と称して傍流視された。

晋は三軍三行を創った3年後、それを三軍と新軍上、下の五軍に改編した。文公は側近の趙衰を新軍上軍の將にした。城濮の戦の時、彼は文公より下軍の將となるよう命じられたが、それを欒枝と先軫に譲っており、文公はその事を憶えていたのである。この軍の編成替えは秋季大演習を清原で行った時になされた。すでに述べた如く、これは狄の侵入を防ぐ目的で行われたものであった。

この年の冬、僖公31年、春秋の経文に「十有二月衛遷于帝丘」衛、帝丘に遷るとある。また同年の左伝によると、狄が衛を囲み衛は帝丘に移った。占ってみると衛は当地で300年間続くと出た。実際、衛は秦の始皇帝が中国を統一した（BC 221）後も残っており、戦国最後に統合された国となった（BC 209）。占いに占った300年より長い420年程続いたことになる。

次の年、晋文公は亡くなり、晋襄公元年に晋と楚は崤で戦い晋が勝利した。その後、赤狄が齊を侵し、白狄が晋を侵した。晋襄公は自ら狄を伐ち大いに狄人を取り、白狄の君主を捕えた。白狄はこれより衰えていった。魯宣公6年になると赤狄が晋を侵し、懷の地を囲み邢丘にまで及んだ。晋公はこの赤狄を伐とうと思ったが、中行の荀林父が言う。“今は伐たないで下さい。戦争は自国の民を苦しめ、それが極点に達すると、赤狄を倒すことは容易にできます。”そう言って赤狄のなすままにしておいた。魯宣公7年に又もや赤狄は晋国を侵し、向陽の地の粟を刈り取った。荀林父は赤狄に自由にさせ、晋側には赤狄に反撃する気力も実力も無いかのように思わせ、所謂、夜郎自大の気持になる様に仕向けた。

赤狄は他の狄人の部属を圧服していたので、晋国はBC 598年、郤缺を派遣して赤狄に使役されている部族と連絡をとり、修好の会を開いた。多くの狄人は晋と親しみ、赤狄は孤立し始めた。しかし、赤狄の力はそう簡単に衰えることはなかった。先穀は晋楚の邲の戦での失策を咎められるのを恐れて赤狄と組み、晋国に赤狄を誘い入れようとした。赤狄は清池までやって来た。BC 596年晋は先穀に邲の戦の責任を取らせ、又赤狄とのつながりの故に、先穀の一族を撲滅させた。晋国は国内の赤狄とのつながりを断ち、赤狄と戦うこととなった。

宣公15年（BC 594）晋景公は荀林父に大軍を指揮させて赤狄の潞氏を攻め、その権臣酈舒を大敗させた。酈舒は衛国に逃げたが、衛人は彼を捕え晋に送った。晋人は彼を殺し、潞国も又滅んだ。晋国は潞国に対する勝利に乗じて更に進み、その他の赤狄部族に侵攻した。魯宣公16年（BC 593）士会は軍を率いて赤狄甲氏と留吁を亡している。彼は戦の後、中軍の將に任命されている。

成公3年（BC 588）の春秋経文に、晋郤克と衛孫良夫が屠咎如を伐つ、とある。左伝ではこの経文の引用に続いて「討赤狄之餘焉」とある。約10年前の宣公15年に荀林父が、16年には士会が赤狄を伐っている。この大物を2年続けて赤狄討伐に向わせたことから、この討伐には晋の並々ならぬ熱意が見てとれる。この討伐は一応の成功を取めたが、当然それを逃れたものがあり、又集結して反抗しようとし

た。それは赤狄のいくつかある国の一つ廡咎如である。この場所は晋国にとって忘れ難い所であった。かつて晋の文公重耳が公子の時、驪姫の乱（BC 655）に会い、自分が守っていた蒲城から逃げ出し母方の狄地に移った。彼と行動を共にした家臣達の中で、左伝に記されているのは狐偃（母方の狄人）、趙衰、顛頡、魏犢、胥臣である。

重耳達が狄の地に居た時、当地の人が廡咎如を伐ち二女を得た。二女の妹を重耳に与え、姉の叔隗を趙衰に与えた。この趙衰の子が趙盾である。それ故趙盾には戎狄の血が半分入っているのである。趙衰には狄の地に逃れて来る前に別の妻が居て、その子供が趙同、趙括、趙嬰の3人である。だが趙盾が嫡子になり趙家を継いだ。

成公3年の役は廡咎如に逃げ込んだ赤狄の残敵を一網打尽にしようとするものであった。この戦を共に戦った郤克と孫良夫は以前から深い関係を持っていた。

鞍の戦は衛の孫良夫が齊の軍と新築で戦い、衛軍が敗北したことより始まっている。孫良夫は衛に戻らず晋国へ行き、軍の出動要請（乞師）をした。丁度そこへ魯の臧孫許も同じ用件でやって来た。二人は執政郤克を通じて晋公に願い出た。その結果800台の兵車が出るようになった。春秋の経文成公2年（BC 589）「季孫行父、臧孫許、叔孫僑如、公孫嬰齊師を帥いて晋郤克、衛孫良夫、曹公子首と会す。」前の4人は魯の卿で、魯軍を率いて戦場にやって来た者で、それを迎えたのは各々の軍を率いた郤克、孫良夫、曹公子首である。

魯宣公17年の夏、断道の地で盟会が行われることになり、郤克は齊国に派遣された。彼は跛と言われていたので、齊公は彼が階段を上る所を見せようと、幕を張って見させた。齊公の母親が郤克が上る姿を見て笑ったので、郤克はそれに気付いて怒った。彼はこのように笑われる経験を度々したであろう。又卿になってからも、面と向っては言わないにしても陰で何か言われているのは感じていたであろう。彼はすぐに帰国して晋公に齊を伐つことを申し出たが、許可されない。自分の家臣兵だけによる出兵を願い出たが、これも許可されない。「請以其私属」其の私属を以てせんと請う。自分の家の兵だけで大国齊と戦おうとするからには、相当な兵を郤家では抱えていたのでであろう。晋の卿族の中で最強の郤氏は「其富半公室、其家半三軍」富も軍も公室の半分を持つと言われている程であった。このような状況下で、衛の孫良夫だけでなく魯の臧孫許までも晋公に齊に対する出兵を請うたことは郤克にとって、願ったり叶ったりであった。今回は晋の景公も出兵を許可した。それ故、郤克と孫良夫は昵懇の間柄と言って良いであろう。

晋国は衛国と連合して赤狄が逃げ込んだ廡咎如を伐ち、続いて他の各部の赤狄を次々と伐ち、全て亡した。かくて、晋国は後顧の憂いを無くしただけでなく国土を拡大した。河北省と山西省の間にある大行山脈を越え東に向い、今の河北の西部に達するまでになった。戦国時代になり、三晋の一つである趙の都は山西省の太原から河北省の西部邯鄲に移っている。

2 晋と戎

晋と戎との関係は若干深いと言える。周人自身本来、戎族姫姓の一支とも言え、晋国は無論姫姓の周

に属しており、戎人が多く住む地域に国を建てた。晋国の統治者は周囲の戎人と相互に婚姻関係を結んでいる。晋献公の寵妾驪姫は戎族であり、重耳、夷吾の母親はそれぞれ大戎子、小戎子で両者共戎族である。重耳は逃げ込んだ家に12年住み、戎の女を妻とした。晋景公の姉は狄族の潞君、嬰子の夫人になっている。晋国の臣下は難に会うと時々、狄や戎の所へ逃げるようである。

晋は戎と共同作戦を行うことがあった。晋と秦が戦った崤の戦はその一例である。晋の文公重耳が死亡した直後、秦軍が鄭国を襲おうとして成功せず、帰国するところを晋戎の連合軍が攻撃した。彼等が採用した攻め方は狩人が鹿を捕えるやり方に習ったものであった。晋人がその角をつかみ、戎人がその脚をつかんで協同で秦軍を負かしたのであった。

魯襄公4年（BC 569）陳国が晋国に服した後、戎族の無終国から使者が来て、魏絳の執成して講和が結ばれるようになった。春秋時代の間に夏華族と夷狄は戦と融和によって、その文化的差異が少なくなり、一つの民族になる傾向がはっきりし始めた。

VI 悼公の内政

晋の悼公が政権に就いた時の政治地図を見ると、その時点で権力を持っていた卿は欒氏、荀氏、士氏、韓氏である。欒氏のトップの欒書は悼公の代になるとすぐ死亡し、その息子欒黶が跡を継いでいる。荀氏の中行偃はそのまま続いている。士氏は、鄆陵の戦の直後士燮が自分から死を願って死に、その息子士匄が跡を継いでいる。韓氏は韓厥がそのまま残り、死んだ欒書の後を継いで中軍の将となっている。中行偃は先君厲公を殺したばかりの人物であり、士匄は親の跡を継いだばかりである。こうした状況から適任者は韓厥しかおらず、又彼の温厚さも利点であった。各卿族がバランスを取って協力し、晋国をもう一度覇者にしたいと思っている悼公にとって、韓厥は願ってもない人物であった。

ここで韓厥の人物評価について欒書の言葉を借りよう。「国語晋語六」の記述である。欒書と中行偃が匠麗氏の家で厲公を囲んだ時、韓厥を呼んだが、彼は断った。中行偃が彼を伐とうと言ったのに対し欒書は言う。「不可」それは出来ない。「其身果而辞順」其の身果にして辞は順。韓厥は事を為すに果断、話に道理がある。「順無不行 果無不徹」順なれば行われざる無く、果なれば徹せざる無し。話に道理があれば実行できない事は無く、事を為すに果断であれば目的に達しないことは無い。「犯順不祥 伐果不克」順を犯すは不祥、果を伐つは克たず。道理を犯すのは不吉であり、果断の人を伐つても成功する筈がない。「夫以果戾 順行民不犯」それ果を以て止り、順を以て行えば民犯さず。彼は果断に結論を出し、即ち我々の召集にはっきり断り、その断った理由にも道理がある。そうなれば民も彼を責めることはない。左伝の成公17年、郤一族が殺された事に「民不與郤氏」民郤氏にくみせず。民は郤氏に協力しようとする気がなかった。この時代でも民の動向は大事である。「吾雖欲攻之 其能乎 乃止」吾之を攻めんと欲すると雖も其れよくせんや 乃止。我々が韓厥を攻めようと思ってもそれが出来るだろうか。駄目でしょう。そこで攻めるのを止めた。欒書は韓厥が事を為すに、時機を見てここぞと言う時果断に実行し、言葉に説得力のあることを認めたのである。悼公も韓厥に関する欒書の意見を聞いた

であろう。

悼公は今までの欒、士、荀、韓氏に加えて新たに趙、魏氏を入れ、韓厥を正卿とする体制を作り上げた。左伝成公18年、悼公は魏相、士魴、魏頡、趙武を卿にしたとある。全般的に見て、その状況では政界で権力を握る人物は居ないように見える。悼公にとっては今や、政界は真空状態である。悼公は新たに国君として即位して、相当程度、自由に腕を振える状況にあると言える。事実、彼は数少ないマイナーな公族、祁奚を中軍の尉、羊舌職をその佐にしている。又魏絳を中軍の司馬にしている。

恐らく、悼公は彼を迎えに来た荀罃と士魴から、晋国の内情について情報を得ていたのであろう。そうでなければ即位してすぐに官の任命がこれ程適格になされなかったであろう。「民無訪言所以復覇也」民に訪言(非難)無し。復た覇たる所以なり。これが晋が再び覇者になった理由である。(左伝成公18年)悼公は政治を行う上で信頼できる側近を是非、採用したいと願ったことだろう。一人で政治を行える筈がないからである。それは思いがけず速やかに実現することになった。

Ⅶ 魏絳の登場

1 楊干の事件

悼公4年、魏絳は中軍の司馬として軍律を厳しく守らせていた。晋国の司馬は楚の国のように総司令官というわけではない。この年、雞丘で諸侯の会が開かれ、その際、悼公の弟、楊干の車が列を乱した。魏絳はその楊干を罰する代りに御者を斬った。悼公は羊舌赤に言った。“我が、諸侯を集め同盟を結ばせたのは自分の名誉を高めるためであるのに、魏絳は自分の弟を辱めた。我が為に彼を取り逃してはならない。”羊舌赤は中軍の元尉(刑罰、盗難の係)の佐である。赤答えて曰く“絳の志は有事には難を避けず、罪有らば刑を避けず。すぐに当地にやって来て、事の次第を述べるでしょう。”言い終るや魏絳至れり。伝令官に書を授けて劍に伏せんとす。士魴、張老両側より止めた。伝令官、書を公に授く。公、書を読む。書曰く“我楊干を罰す。こうすれば自分が死罪になる事を十分に心得ています。以前、国君には使える人材が少く、私を中軍の司馬にして下さった。聞く所によると、軍隊では、軍律厳しい中なれど、それに従う事こそ武です。又戦時には死しても軍律を犯さない事が敬とされています。君が諸侯を会合なさる時に、私がどうして自分の職務を守らないことがありますでしょうか。君は私のやり方を悦ばれないので、どうか死なせて下さい。”公は跣で飛び出して言った。“私の言は兄弟の礼です。あなたが楊干の御者を殺したのは軍律を守る為です。どうか私の犯した過ちを二度もさせないでくれ。”悼公は雞丘の盟会から帰国し、大夫の礼を以て魏絳を招待し、彼を新軍の副将(佐)にした。この新軍は大国が持つべき中上下軍の三軍以外に、新たにもう一軍を設立したものである。

張老は悼公から卿への就任を要請された時、自分は断り魏絳を強く推している。「臣不如魏絳」臣は魏絳に及ばず、その智は卿となって、充分その任に堪え、何れ国内外に平和をもたらすであろう、と告げている。以上は国語「晋語七」の記述である。この事は魏絳が卿となるのに役立ったであろう。

2 魏絳と無終国

魏絳が新軍の卿になった翌年、無終国の国君嘉父が孟楽を使いによこし、魏絳を通じて虎や豹の皮を晋公に納めた。それは晋国が戎の国々と平和的な関係を結ぶよう願っての事だった。悼公曰く「戎狄無親而好得、不若伐之」戎狄親無くして得を好む。之を伐つに如ず。戎や狄の連中は親しみの感情は無く、財貨を得ることを好む。之は伐つに限る。」魏絳言う「我が国が戎人に対し兵を用いれば、その間に楚が陳を攻めても我が国は陳を助けられません。その結果、中原諸国に対して支配権を失うことになります。たとえ戎に対して作戦が成功しても、獸を得て人を失うようなものです。どうしてそのような事が出来ましようか。その上、戎人、狄人は水草を逐って住み、財貨を貴び土地を軽く見えています。それ故、この人達に財貨を与え、晋国が土地を獲得できることが第1の利点です。また戎人との関係が平和になれば、辺境一帯で農業を営む農民はもはや戎人の侵入を恐れる必要が無くなります。これが第2の利点です。戎狄が晋国に仕えるようになれば、近隣諸国は対戎狄戦の備えが不要になった晋国が矛先を自分達に向けるのではないかと脅威を感じて震え上るに違いありません。これが第3の利点です。」「君其圖之。公説」君其れ之を図れ。公説（=悦）ぶ。「希望君主考慮考慮。悼公听了很高兴」願わくば君主よ、少しくお考え下さい。悼公はそれを聞いて大いに喜んだ。

悼公は魏絳をいくつかの戎人の国々に送り、彼等と講和し、和やかな良好な関係を築くことが出来た。「於是乎遂伯」是に於いて遂に伯たり。ここに於いて晋国は天下に覇を称するようになった。

Ⅷ 悼公の外政

鄆陵の戦で晋が勝利したとは言え、楚が大損害を蒙ったわけではなく、国力を充分温存していた。鄭も同様である。それ故、戦後の郤氏の族滅、厲公の死、新たな悼公の即位等を見た楚はこの難に乗ずるかのようになり、宋の彭城を占拠し、晋から楚に亡命していた魚石達をそこに入れた。しかし、晋は宋と協力して其を取り返した。又鄭もこの間、楚に協力して晋や宋に対抗した。そこで、彭城の戦が晋側の勝利で終わった後、晋はその勢を借りて、韓厥、荀偃が諸侯の師を率いて鄭を伐った。（悼公元年）かくて、鄭の国都へ迫り、郭に攻め入った。城とは城市のことで都市である。内城と外城に分かれていて、それぞれを城郭という。郭は郭の大規模なものを言い、新鄭城が大規模なことを示している。鄭は周の平王が東遷して洛陽に来る前に、陝西省から河南省の新鄭に移っている。

晋が鄭を攻めた時、東の諸侯の師は鄆に駐屯していた。襄公元年の経文に「仲孫蔑が齊の崔杼・曹人・邾人・杞人に会して鄆に次（駐屯）」とある。仲孫蔑と崔杼は鄆の地で晋軍を待ち、その間、どの道暇で二人は色々な話をしたことであろう。鄆の地で、鄭を攻めた晋軍が来るのを待ち、合流して楚の焦夷を侵し、陳国まで攻め込んだ。

翌年の春秋襄公2年「秋7月、仲孫蔑が晋の荀罃、宋の華元、衛の孫林父・曹人・邾人と戚の地に会す」とある。魯の仲孫蔑が主催して会を開いたように書かれているが、春秋は魯の春秋である故、当然、自国を主体にしている。実際は当時の盟主国である晋の荀罃が開いたものである。

ここには中原諸国の卿の最有力者が揃っているが、前年の鄆の時と異なり、齊の卿、崔杼の名が無い。この会は鄭を伐つ相談をするためのものである。鄭は楚の荘王が鄭城を占拠し、その後鄭を許して以来、鄭は大体において楚に帰属している。特にこの年に亡くなった鄭成公の時代は殆んど楚に帰属し、時に晋に付いたとしても、すぐ楚に戻っている。晋は何とか鄭を恒状的に晋に付かせようとした。この会に参加した魯の仲孫蔑が晋の荀罃に提案した。「請城虎牢以偪鄭」請う、虎牢に城き以て鄭に偪らん。晋が鄭から占拠した虎牢に城壁を築き、鄭に圧力を加えよう。仲孫蔑の提案を聞いた晋の荀罃は即座に「善」大変結構と言い、さらに続けた。「鄆之会、吾子聞崔子之言、今不来矣、滕・薛・小邾之不至皆齊故也」鄆に集まった時、吾子（あなた）は齊の崔杼の言を聞かれたでしょう。杜注によると、襄公元年、仲孫蔑が齊の崔杼と鄆に駐屯していた時、崔杼に晋に服せざる言有り。仲孫蔑はそれを荀罃に告げた。

崔杼は今、来たらず。齊の息のかかった滕・薛・小邾の如きもやって来ていないのは齊のせいである。我が君の憂は鄭だけではない。自分は虎牢に城壁を築く事を晋公に進言し、齊にも工事に参加するよう要請しましょう。もしその事が実現すれば、それはあなたの功績です。もし齊が要請に応じなければ、我々は齊を伐つつもりです。「吾子之請、諸侯之福也」あなたの提案は諸侯全体の福となるものです。どうして我が君だけに役に立つものでありましょうか。

同年の冬、再度会を開いた。今回は齊の崔杼も滕、薛、小邾の大夫も参加した。このようになったのは荀罃の齊を伐つという言葉の故であった、とこの年の左伝に記されている。「遂城虎牢、鄭人乃成」遂に虎牢に城き、鄭人乃ち成ぐ。そこで虎牢に城壁を築いた。すると鄭は晋に服従した。

虎牢という地は鄭人にとって特別なもので、それ故、これを晋に奪われたことは大きな恥辱であった。魯の荘公21年（BC 673）のことである。王子頹とのトラブルにより、鄭の厲公は周の恵王を首都洛陽から鄭の櫟に移した。その後、厲公は虢叔と協力して恵王を都に戻した。かつて周の平王が鄭の武公に与えた土地の境界は虎牢であったが、恵王はそれより東の地を鄭の厲公に与えた。虎牢は間違いなく周王から鄭に下賜された土地であり、諸侯国の君主がそれを奪うことは許される事ではない。ましてや、襄公2年の戚の会に集ったメンバーは全て各国の大夫である。

従来春秋の戦は罪を刑することで、非道な国を天子の命でそれを正すためのものであった。諸侯はそのことに協力するのである。即ち、天に代りて不義を伐つことである。春秋期に入り、大国は次々と小国を占拠して自分の領地に行っている。だが、さすが中原諸国家同士では、戦って講和を結べば軍を自国に帰していた。そのため鄭との戦はいつまでも続いていると言え、虎牢に城壁を築いたのは戦いに終止符を打ちたい、ということであった。楚の北上のルートに当り、且、楚に近い陳、蔡は楚の領地になったり独立国家になったりしている。これは楚側の都合によるものである。

鄭は中原諸国家の中では色々な点で、特異な状況にある。国の創立時期が中原の魯、衛、宋とは全く異っている。上記の三国は周の創設者、文王・武王の時代からの国であるのに反し、鄭は西周の終り頃生まれた。周の厲王が反乱に会い逃亡せざるを得なくなり、王の居ない状態になった。そこへ共伯和が現れ、王の代行をした。但し、史記では周公、召公が共同して政治を行ったことになっている。何れにせよ、現在、我々が共和制と称し、王制でない政治を指す‘republic’の訳語として用いている共和と

いう言葉は、この時の言葉を借用しているのである。日本は幕末から明治にかけて欧米の文物を取り入れたが、その言語を理解できる人間は極少数であった。それに比べて漢文は多くの人が読んでおり、取り入れたものの大部分は漢籍を通じて読解し翻訳した。特に江戸時代には漢学が学者や僧侶だけでなく、一般に広く普及していた。外交交渉で日本に来航した欧米の船には必ず中国人が乗り込み、外交交渉の際、その国の外交文書が英文であれ仏文であれ、副本として必ず漢文の文書が添えられていた。当時、漢籍の中で日本で最も重要視されたのは「海国図志」と「万国公法」で、前者は魏源の著書、後者はアメリカ人宣教師、丁韞良（W. A. Martin, 北京京師大学堂教習）が漢文訳したものである。これらの事は「中国古典文学への招待」の「雑書」雑談（増田渉，平凡社）に詳しい。

IX 鄭の二境作戦

鄭は今でも新鄭と呼ばれている。河南省の省都は鄭州で、鄭州市は北京西駅より南下し、黄河の大鉄橋を渡るとすぐの所にある。新鄭はこれより南へ約 50km 弱行った所にある。すでに述べた如く新鄭と呼ぶのは陝西省にあった鄭から河南省に移ってきたからである。これ以降、新鄭ではなく鄭で通す。

鄭は豊かな河南平原の中にあり、交通も便利な土地である。それ故、春秋の初期、中原諸国の中で最も有力な国で、周王朝とも対抗する程であった。その後、齊晋楚秦のような大国が出現し中級の国家となった。特に南方の大国、楚が北上するルート上にあるために楚と楚に対抗する晋との間に立ち、どちらにも礼を尽さざるを得なかった。鄭の成公が晋に行った時、楚と同盟したことを責められ、捕えられる事件があった。それ以来、成公は死ぬまで楚側に付いていた。死ぬ時には卿である子駟に“楚の共王は鄭を守る為に目に傷を受けられた。我等はその恩に報いるためにも楚との盟約を続けてもらいたい。”と言って死んでいった。

晋の文公のお蔭で国君になった鄭の穆公の子供七穆が鄭の政治の実権を握っていた。（魯の三桓と同様である。）成公が亡くなり次の僖公が即位した時、晋以下東方諸侯国が虎牢に城を築いて鄭に迫ったため、鄭はやむなく成公の言葉に背いて晋に加わった。その時楚は呉と戦い大敗したので、中原に向うのを控えていた。その後間もなく僖公は子駟により殺されている。この君主は太子の時から七穆とは不仲であった。どこの国でもある事だが、僖公は成公の国君としての権力の無さを、太子の立場で見えてきた。故成公が晋に捕えられとすぐに、次の国君を立てようとした事からも見てとれた。僖公は君主になっても自分の思い通りにはならない。何しろ7人もの公族が宮廷内で頑張っているのである。彼が晋の会に行く際にも彼に伴う者はいない。七穆は楚の実力を知っているため、全面的に晋側に付くことには反対であった。むしろ僖公の権力の増大を恐れたのが本音であったかも知れない。春秋時代のこの期になると、盟会に出席するのは卿大夫で、国君が出席することは殆んど無い。宋の彭城が楚に占領された時、宋は諸侯国に出兵を依頼しながらも、君主は来ないよう望んだことさえある。然るに、僖公は重臣の付き添い無しに、晋の会に出席するため出発し、子駟に殺された。晋には僖公が急病で死んだと報告した。彼の在位は5年であった。子駟は本名で其れを呼べるのは君主と父。普通は字で子駟。

子駟はすぐに5才の簡公を立てた。無論、この間の事情は直ちに鄭国内に知られ、公子達は子駟に反撃しようと集まっていたが、子駟は機先を制してそれを撃滅した。そして七穆の子国（その子は有名な政治家鄭の子産）と子耳との三人で鄭の政権を握ることになる。何しろ国君はわずか5才である。続いて、子駟達は楚と同盟していた蔡を攻め勝利を収め、晋が盟主である邢丘の会に出席してその報告をした。鄭人達は久々の勝利に大喜びであった。ただ一人子産だけが心配した。もし楚が攻めて来ればどうしようもない、楚に付けば晋が攻めて来るだろう。そうなれば鄭国の安全も平和も無くなるだろう、と言っている。事実はその通りで、何度も繰り返されたことであった。

魯襄公8年（BC 564）の冬、楚軍が攻めて来た。ここで七穆は割れ、一方は子駟、子国、子耳で、もう一方は子孔、子僑、子展であった。子駟達は次の様に言った。「しばらくは楚に従って民の苦しみを避けよう。「晋師至、吾又従之」晋の師至らば、吾又之に従う。晋軍が来たら又それに従えば良いだろう。犠牲玉帛を用意して、鄭の北の晋との国境と南の楚との国境の両方で待ち受け、強い方に付いていれば民を守ることができる。」楚も晋も信義を守っていないのだから、こちらを守る必要はない。唯、強い方に付きさえすれば良い、というのが鄭の以前からの主張であった。そして楚の方が強かったので、鄭は楚に付くことが多かった。但し、この強さは絶対的な強さを言うのではなく、鄭の地政学的位置から見て判断しているのである。晋からは黄河を越えて大軍を送らねばならないのに対し、楚は前進基地、申（現在の河南省南陽）から出動できることを計算に入れている。

これに対し子展は“小国は信義を守る事が大切だ。晋と5度も盟会を結んだのにそれを破るのでは、楚は我々を救ったとしても、我々を信用しないだろう。そして楚は我が国を自分の領地にするだろう。それこそが彼等の欲している事で、「不可従」従うべからず。楚に従ってはいけない。”と反論した。だが、子駟はこれを受け入れず、“色々議論はするが、それに対して責任を取るとは誰も言っていない。楚に従おう。私が責任を取る”と言った。そこで楚との講和が成立したが、これで終るわけではなかった。

翌年、襄公9年に晋は鄭に対して大規模な遠征軍を編成した。

中軍 荀罃、士匄、齊の崔杼、魯の季孫宿、宋の皇^{うん}郈

上軍 荀偃、韓起、衛の北宮括、曹人、邾人

下軍 欒黶、士魴、滕人、薛人

新軍 趙武、魏絳、杞人、郟^{けい}人

中上下軍は担当の門を攻撃し、新軍は道路脇の栗の木を切って軍用に供した。前哨戦が終わった後、全軍は鄭の汜に集合した。晋侯は諸侯に命令した。“武具を整備し、食糧を貯え、軍中の老幼を帰し、病人は虎牢城に置き、軍律を犯した者を許し、鄭城を包囲せよ。”鄭人はそれを聞いて恐れ、人を派して晋軍に和を求めた。上軍の将荀偃は言う。“すぐに鄭城を包囲せよ。救援にやって来る楚を待ち受け、彼等と決戦し敗北させる。そうでもしなければ鄭国は心から講和をする筈はない。”中軍の将 荀罃は言う。“我々は鄭の和を求める請求を認め、その盟を許し、然る後、諸侯の軍を返そう。それを見て楚軍は鄭を攻めて来る。そこで楚の軍隊を以下の作戦で疲労困憊させよう。我が軍中、上、下、新軍を3

つに分け、そして諸侯の精鋭部隊も3つに分けて晋軍に加え、前進して来る楚軍を迎え撃つことにする。そうすれば、我が軍は3分の1ずつローテーションで楚に当るので疲れないが、楚軍は疲れて戦えなくなるだろう。鄭城を包囲し、楚軍を待ってそれと決戦するよりも、この作戦の方が勝っている。（城攻めには攻撃軍は守備軍の3倍以上の軍を必要とする。）死ぬ程戦い、白骨を野にさらし、一時の気が晴れても、その様な事でこの戦に勝利はない。更に大きな任務が我々を待っているのだ。指揮官たる者は作戦をよく考え、兵はそれに従って全力を尽して戦うのが先王の教えである。”諸侯達は皆戦いをしたくなかったので、鄭との和平提案を受諾した。

盟会の一場面が左伝襄公9年に書かれている。和平の盟会には鄭の国君、簡公が執政（子駟）を始め他5人もの卿、彼等の大夫達、卿の嫡子等が簡公の付き添いとして参集した。晋国の士弱が盟書を起草し言った。“本日、盟会の約束ができた後、鄭国がもし晋国に対し専心晋の命に従うことをせず、二心を抱くなら、この盟書にあるような罰を受ける事になる。”これに対し鄭側の子駟は進み出て言った。“天は鄭国に禍を下し、晋楚二大国間に我々を置かれた。この二大国は我々に好き事は何も与えず、それどころか、戦乱だけを強要している。我々は先祖の霊も祭れず、民は農作物も収穫できない。夫婦は辛苦し疲れ苦しめても訴える所もない。この盟会の後、鄭国は唯、礼と力があって民を保護することの出来る国にだけ従うことにする。この様な国に敢て逆らうならば、この盟書にある罰を受けることになる。”これでは戦勝国の立場が無いと思った晋の荀偃は盟書の誓の言葉を改めるように言った。鄭の公孫舍之は“既に盟約書は神に告げたものです。もし誓の言葉さえ改められるなら、大国にだって叛いて良いこととなります。”と言った。盟会の最中に口論が始まった様である。荀偃が荀偃に言う。「我実不徳而要人以盟」我実に不徳にして、人に要するに盟を以てす。我々は実に不徳で、無理にも誓わせたのです。これが礼なのでしょう。非礼な事をして盟主になれるのでしょうか。しばらくは和平の盟を結び兵を引き、「修徳息師而来終必獲鄭」徳を修め、師を息はせて来たらば、終には必ず鄭を獲ん。徳を修め軍を休ませて又やって来たら、その時は鄭を服従させることが出来るでしょう。「何必今日、我之不徳民將弃我、豈唯鄭」どうして必ず今日でなくてはならない事があるのか。我々が不徳ならば、民は我々を棄てるだろう。それは鄭だけに限らない。若し能く民を休ませ、平和に暮らさせるなら、遠くの人も来るだろう。何ぞ鄭だけを頼みにすることがあるのか。そう言って盟して帰った。左伝ではここの最後の所で「晋人、志を鄭に得ず」と書いている。晋は大軍を引き連れて来た割には、充分鄭を服従させることが出来なかった、と記してある。

参考文献

本篇の公羊穀梁傳の歴史的背景は‘春秋’及びその三伝と史記に基づいて書いたものである。以下の参考文献以外にも多数の歴史書、古典訳書を参照したが、ここには挙げていない。

1. 春秋史 顧徳融 朱順龍 上海人民出版社 2001年
春秋期の政治史以外に社会経済史、地方組織、政治、軍事制度、社会構成、思想、芸術、科学技術、礼儀

風俗等、春秋時代全般を広くカバーし、この時代を見るには現在の所、必見の書と思われる。

2. 春秋戦国的社会変遷(上下) 晁福林 商務印書館 2011年
3. 左傳国策研究 郭丹 人民文学出版社 2004年
4. 春秋婚姻礼俗と社会倫理 陳筱芳 巴蜀出版 2000年
5. 《春秋》経傳研究 趙生群 上海古籍出版社 2000年
6. 《春秋》考論 婁曼波 江蘇古籍出版社 2002年
7. 国語集解 徐元誥 中華書局 2006年
8. An Outline History of China Bai Shouyi Foreign Language Press Beijing (2005)

**成公10年—成公17年までの通釈
凡例**

- 一. 本通釈は底本として『春秋三傳』(朱子小學及四書五經讀本 世界書局・臺灣)を用いた。
- 二. 経文の頭の数字は公の順番, 年, その年の経文の順番を表わす. 公の順番: 隱公1, 桓公2…哀公12例) 5/10・5 僖公/10年・5番目の経文
- 三. 譯文中の「」は原文引用と譯文引用,〔〕は譯者による意味の補い,()は, 語句の簡単な説明,“ ”は會話文である。
- 四. 通釈は, 以下を参照した。

- 王維堤・唐書文『春秋公羊傳譯注』(上海古籍出版社, 1997年)
 - 薛安勤『春秋穀梁傳今註今譯』(台湾商務印書館, 1994年)
 - 承載『春秋穀梁傳譯注』(上海古籍出版社, 1999年)
 - 李宗侗注釋『春秋公羊傳今註今譯』(台湾商務印書館, 1972年)
 - 傅隸樸『春秋三傳比義』(上・中・下)(中国友誼出版公司, 1984年, 北京)
 - 玉寧主編『評析白話公羊傳・穀梁傳』(北京廣播學院出版社, 1993年)
 - 劉尚慈『春秋公羊傳譯注』(上・下)(中華書局, 2010年)
- 以上の他,『何氏解詁』等, 伝統的な解説書や国内刊行の三傳関係の書を利用させていただいた。

8 / 10 - 1 十年

春

8 / 10 - 2 衛侯之弟黑背帥師侵鄭

8 / 10 - 3 夏四月五卜郊不從乃不郊

【公羊】其言乃不郊何。不免牲。故言乃不郊也。

【穀梁】夏。四月。不時也。五卜。疆也。乃者。亡乎人之辭也。

【公羊譯】經文で「乃不郊（すなわち郊せず）」即ち、郊祭を行わないとあるのはどういう意味か。この場合には、郊祭に供える犠牲の牛を放免しなければならないのに、その牛を放免せずに食べてしまった。それ故「乃」は、止むを得ずの意で、止むを得ず郊祭を行わなかった。

【穀梁譯】夏四月に占っているが、これは季節に合っていない。しかも、五度も占っているのは余りにも度が過ぎる。「乃不郊」の「乃」は人には処置することのできないことを表している辞である。

8 / 10 - 4 五月公會晉侯齊侯宋公衛侯曹伯伐鄭

8 / 10 - 5 齊人來媵

8 / 10 - 6 丙午晉侯孺卒

8 / 10 - 7 秋七月公如晉

8 / 10 - 8 冬十月

8 / 11 - 1 十有一年

8 / 11 - 2 春王三月公至自晉

8 / 11 - 3 晉侯使郤犢來聘己丑及郤犢盟

8 / 11 - 4 夏季孫行父如晉

8 / 11 - 5 秋叔孫僑如如齊

8 / 11 - 6 冬十月

8 / 12 - 1 十有二年

春周公出奔晉

【公羊】周公者何。天子之三公也。王者無外。此其言出何。自其私土而出也。

【穀梁】周有入無出。其曰出。上下一見之也。言其上下之道。

無以存也。上雖失之。下孰敢有之。今上下皆失之矣。

【公羊譯】周公とは何者か。天子の三公のひとりである。王には天下を統治しているから外がない。それなのにここで周公が出ると経文にあるのは何故か。これは自分の封ぜられた土地から逃げたのである。

【穀梁譯】経文では、周に人が入ることは記載するが、周から外へ出ることは記載しない。ここでは「出」と書いてある。春秋には「上」すなわち天子が周から出たことは一回、これは僖公24年のことである。なお、「下」すなわち大臣の「出」は成公12年のことだけである。これは天子にも大臣にも道義が備わっていないことを表している。だが天子がたとえ道義を失ったとしても臣下はどうして臣下の道を尽くさずにおられようか。今や周王室の君臣の道はすでに失われてしまっている。

8 / 12 - 2 夏公會晉侯衛侯于瑣澤

8 / 12 - 3 秋晉人敗狄于交剛

【穀梁】中國與夷狄不言戰皆曰敗之。夷狄不曰

【穀梁譯】中原の諸侯国が夷狄と交戦した場合には「戦」とは言わず一律に之を敗ると言っている。夷狄が敗られた場合経文はそのことのあった日付は記載しない。

8 / 12 - 4 冬十月

8 / 13 - 1 十有三年

春晋侯使郤錡來乞師

【穀梁】乞。重辭也。古之人重師。故以乞言之也。

【穀梁譯】經文中に「乞」という字を使用しているが、これは物事を重大視していることを表す言辞である。昔の人は軍隊を重大な存在とみなしていたので、「乞」という字を用いて軍の救援を求めたのである。

8 / 13 - 2 三月公如京師

【穀梁】公如京師不月。月非如也。非如而曰如。不叛京師也。

【穀梁譯】魯の成公が周の都へ行って天子に出会う場合一般にその月は記載しないのに今ここに3月と記載してある。このたびの旅行は単に周の都洛陽へ行って周王に朝見するだけの目的ではない。それ故、三月と書き、行かない（「非如」）と書いたのである。実は成公はこの後、晋侯、宋公、鄭伯らに会い秦を伐つことを計った。だが、行かないと書いたのにまた行くと書いているのは、魯の成公が周王を尊敬しているということを表している。

8 / 13 - 3 夏五月公自京師遂會晋侯齊侯宋公衛侯鄭伯曹伯邾人滕人伐秦

【公羊】其言自京師何。公鑿行也。公鑿行柰何。不敢過天子也。

【穀梁】言受命。不敢叛周也。

【公羊譯】經文に「京師より」と書いてあるがどうということか。成公が道を改めて進んだ。成公はどのように道を改めて行ったのか。天子を通り過ぎて朝見しないことがないように道を改めた。

【穀梁譯】周の都、京師を通過して成公が当地に来たと經文にあるが、これは京師で周王から秦を討てという命令を受けたということの意味している。このように書いたのは周

王に叛こうとしていないことを表している。

8 / 13 - 4 曹伯廬卒于師

【穀梁】傳曰。閔之也。公大夫在師曰師。在會曰會。

【穀梁譯】穀梁傳では、曹伯宣公の死を憐れんでいる。諸侯又は大夫が軍中で死ぬと「于師」と書き盟会中に死ぬと「于会」と書く。

8 / 13 - 5 秋七月公至自伐秦

8 / 13 - 6 冬葬曹宣公

【穀梁】葬時。正也。

【穀梁譯】葬式の季節すなわち冬を書いたのは、礼法に合っている。

8 / 14 - 1 十有四年

春玉正月莒子朱卒

8 / 14 - 2 夏衛孫林父自晉歸于衛

8 / 14 - 3 秋叔孫僑如如齊逆女

8 / 14 - 4 鄭公子喜帥師伐許

8 / 14 - 5 九月僑如以夫人婦姜氏至自齊

【穀梁】大夫不以夫人。以夫人。非正也。刺不親迎也。僑如之挈。由上致之也。

【穀梁譯】大夫は国君の夫人を迎えに行ってはならないのに、この経文では、夫人を迎えに行っている。これは礼法に合致していない。故に、成公が自ら齊に行って夫人を迎えなかったことを非難している。僑如が夫人を迎えに行ったのは礼法に合わないとはいえ、これは成公が命じたことである。

8 / 14 - 6 冬十月庚寅衛侯臧卒

8 / 14 - 7 秦伯卒

8 / 15 - 1 十有五年

春王二月葬衛定公

8 / 15 - 2 三月乙巳仲嬰齊卒

【公羊】仲嬰齊者何。公孫嬰齊也。公孫嬰齊。則曷爲謂之仲嬰齊。爲兄後也。爲兄後。則曷爲謂之仲嬰齊。爲之後者。爲之子也。爲人後者。爲其子。則其稱仲何。孫以王父字爲氏也。然則嬰齊孰後。後歸父也。歸父使於晉。而未反。何以後之。叔仲惠伯傅子赤者也。文公死。子幼。公子遂謂叔仲惠伯曰。君幼如之何。願與子慮之。叔仲惠伯曰。吾子相之。老夫抱之。何幼君之有。公子遂知其不可與謀。退而殺叔仲惠伯。弑子赤而立宣公。宣公死。成公幼。臧宣叔者。相也。君死不哭。聚諸大夫而問焉。曰。昔者叔仲惠伯之事。孰爲之。諸大夫皆雜然曰。仲氏也。其然乎。於是遣歸父之家。然後哭君。歸父使乎晉。還自晉。至櫪。聞君薨。家遣。墮帷。哭君成踊。反命於介。自是走之齊。魯人徐傷歸父之無後也。於是使嬰齊後之也。

【穀梁】此公孫也。其曰仲何也。子由父疏之也。

【公羊譯】仲嬰齊とは何者か。これは公孫嬰齊のことである。公孫嬰齊であるのに何故経文ではこれを仲嬰齊と言っているのか。それは卿士である兄の位をこの人が継承したからである。兄の継承者になったらどうしてこれを仲嬰齊と言うのか。その人の後を継いだ人はその人の子になる。その人の後を継いだ者がその子になるならば、何故経文で仲嬰齊と言っているのか。孫は祖父の字（あざな）を氏とする。それならば、嬰齊は誰の後を継いだのか。歸父の後をついだのである。歸父は晋に使いに出たまま魯国に帰って来なかった。それなのに何故彼の後を継いだのか。叔仲惠伯は文公の嫡子である子赤の後見役であった。文公が死亡した時その子、子赤は幼かった。そこで、公子遂は叔孫惠伯に言った。「子赤は君主に成るには余りにも幼すぎる。どうしたらいいだろう。出来れば、あなたと共にこのことを考えてみたい」。叔孫惠伯が言った。「あなたは子赤を補佐しているし、本来70歳で辞めるべき大夫の役を要請されて続けている老婦である自分が子赤を抱えている。何も出来ない幼君とは言えないではないか」。公子遂は彼とは一緒に相談出来ないことを知って退出し叔仲惠伯を殺し、子赤を弑して宣公を立てた。宣公が死んでその後継者成公は歳が幼かった。臧宣叔が成公の補佐の卿であった。臧宣

叔は成公の補佐の卿であった。宣公が死んでも葬儀の時に泣かないで大夫たちを集めて聞いた。「先年、叔仲恵伯が殺された事件は誰がやったのだろうか」。それに対して大夫たちは次々に言った。「あれをやったのは仲氏の人（これは公子仲遂のこと）である」と言って「間違いないでしょう」。そこで公孫婦父の一家を全て追放し、それが終わって亡き先君の哭葬を行った。当時、婦父は晋国に使いし晋国から帰って来て榘（テイ）の地まで来て、宣公が死に自分の家が既に追放されたのを聞いた。そこで地を払い、帳を張り宣公を祭り哭踊の礼を行った。その後、副使に命じて帰国させ帰朝報告をさせた。そこで、ここより逃げて齊国に至った。魯国の人々は徐々に（何氏解詁の説、即ちこの「徐」を「共」全ての意味に取っている）婦父が自分の後継ぎがないことに悲しみを感じ、そこで弟の嬰齊に後を継がせた。

【穀梁譯】 経文で公孫であるのに、仲嬰齊といっているのはなぜか。こう書いてあるのは子どもは父の行為の責めを負って、本来の身分を書けない。

8 / 15 - 3 癸丑公會晉侯衛侯鄭伯曹伯宋世子成齊國佐邾人同盟于戚

8 / 15 - 4 晉侯執曹伯歸于京師

【穀梁】 以晉侯而斥執曹伯。惡晉侯也。不言之。急辭也。斷在晉侯也。

【穀梁譯】 経文では晋の厲公の名を挙げて、曹伯を捕らえたを書いて彼が曹国の国君を捕らえたのを責めているの。経文では「歸」の字の後ろに「之」という字が書いてないのは、これはこの行為が非常に早く行われたことを表している。それは、この事件は全て晋国の国君が一人で決定したからである。

8 / 15 - 5 公至自會

8 / 15 - 6 夏六月宋公固卒

8 / 15 - 7 楚子伐鄭

8 / 15 - 8 秋八月庚辰葬宋共公

【穀梁】 月卒。日葬。非葬者也。此其言葬何也。以其葬共姬。不可不葬共公也。葬共姬。

則其不可不葬共公何也。夫人之義。不踰君也。爲賢者崇也。

【穀梁譯】 死亡した時にその月を書き、葬式を行った時にその日を書いているのは、これは正常な葬式ではないことを表している。それなのに、経文で、葬式を行ったと書いてあるのは何故か。以前、賢徳ある共姫を葬っているが、その夫である国君は夫人以下の礼節はない。それ故、共公の葬式をおこなわざるを得ない。

8 / 15 - 9 宋華元出奔晉宋華元自晉歸于宋宋殺其大夫山宋魚石出奔楚

8 / 15 - 10 冬十有一月叔孫僑如會晉士燮齊高無咎宋華元衛孫林父鄭公子鮪邾人會吳于鍾離

【公羊】 曷爲殊會吳。外吳也。曷爲外也。春秋內其國而外諸夏。內諸侯而外夷狄。王者欲一乎天下。曷爲以外內之辭言之。言自近者始也。

【穀梁】 會又會。外之也。

【公羊譯】 どうして吳との会見のことを特に分けているのか、これは吳を中原諸国以外の国と考えている。何故、外の国にしているのか。春秋経では、魯国を内とし中原諸国、即ち、諸夏を外としている。諸夏を外とした場合、夷狄を外にしている。王者は天下を統一したいと望んでいる。それなのにどうして、天下を内と外に分けるような言葉を使うのか。それは、天下の統一は近くより始めるという意味である。

【穀梁譯】 まず、叔孫僑如が各国の大夫に会い、その後又、呉国に会ったと書いてあるが、これは、呉国を中原諸国の外に置くためである。

8 / 15 - 11 許遷于葉

【穀梁】 遷者。猶得其國家以往者也。其地。許復見也。

【穀梁譯】 経文にある「遷」とは、ひとつの国全体が全て他の場所に移ることを意味する。「葉（しょう）」という土地に移ったと書いてあるのは、許国がまたその地に出現したことを意味している。

8 / 16 - 1 十有六年

春王正月雨木冰

【公羊】雨木冰者何。雨而木冰也。何以書。記異也。

【穀梁】雨而木冰也。志異也。傳曰。根枝折。

【公羊譯】「雨木冰」とは、「雨而木冰」雨が降ってその後、木が凍ったという意味である。これは、異変を記載したのである。

【穀梁譯】雨が降ってその後、木が凍ったのであり、自然の変異を記したのである。ある傳、即ち、ある解説書には、根も枝も折れたとある。

8 / 16 - 2 夏四月辛未滕子卒

8 / 16 - 3 鄭公子喜帥師侵宋

8 / 16 - 4 六月丙寅朔日有食之

8 / 16 - 5 晉侯使欒黶來乞師

8 / 16 - 6 甲午晦晉侯及楚子鄭伯戰于鄢陵楚子鄭師敗績

【公羊】晦者何。冥也。何以書。記異也。敗者稱師。楚何以不稱師。王瘡也。王瘡者何。傷乎矢也。然則何以不言師敗績。未言爾。

【穀梁】日事遇晦曰晦。四體偏斷曰敗。此其敗。則目也。楚不言師。君重於師也。

【公羊譯】この場合は「晦」とはどういう意味か。「冥」即ち暗いという意味である。何故それを書いたのか。自然の変異を書いたのである。負けた方は一般的に「師」即ち楚師と言うのが一般的であるのに、この経文では単に「楚子」と「鄭師」が戦いに敗れたと書いてある。負けた方は、「師」と、即ち、楚師と言うべきなのに、楚は何故、師と言わないのか。それは、楚王、共が戦いで目を傷つけられたからである。楚王が傷つけられたのはどのような状況であったか。矢に打たれたのである。それならば何故、今までの例のように、師敗績と言わないのか。国君が傷を受けたのは重大事であるから、楚の師が傷を受けたことが、はるかに重大なことであるから、楚師のことを言わなかったのである。

【穀梁譯】この戦いが起こった日はちょうど月末に当たっていたので、晦、即ち、月末

と書いたのである。四肢が全て傷つけられたのを、敗戦というのである。ここで、敗と言っているが、実は楚王の目が傷つけられただけである。それ故、楚国にとっては、楚師が敗れたというほどのことはない。さらに、君主は軍よりも重要な存在であるから、師のことを問題にしていない。

8 / 16 - 7 楚殺其大夫公子側

8 / 16 - 8 秋公會晉侯齊侯衛侯宋華元邾人于沙隨不見公

【公羊】 不見公者何。公不見見也。公不見見。大夫執。何以致會。不恥也。曷爲不恥。公幼也。

【穀梁】 不見公者。可以見公也。可以見公而不見公。譏在諸侯也。

【公羊譯】 「不見公（公に会わず）」と經文にあるが、これはどういう意味か。魯の成公が晋侯に会ってもらえなかったということである。成公は合ってもらえず、魯の大夫季孫行父も捕らえられる。大夫もとらえられたのにどうして魯公がこの会より帰ってきたと次の經文にあるが、これは別に恥ではない。何故恥ではないのか。このとき成公は幼くいまだ自ら政治を行っていない。それ故、恥であるとすればそれはすべて執政大夫の責任である。

【穀梁譯】 經文に「不見公」とあるが、この意味は本来魯公に会っても差し支えないことを表している。本来差し支えないのに魯公に会わないのは、諸侯の方に非があることを示している。

8 / 16 - 9 公至自會

8 / 16 - 10 公會尹子晉侯齊國佐邾人伐鄭

8 / 16 - 11 曹伯歸自京師

【公羊】 執而歸者名。曹伯何以不名。而不言復歸於曹何。易也。其易奈何。公子喜時在內也。公子喜時在內。則何以易。公子喜時者仁人也。內平其國而待之。

外治諸京師而免之。其言自京師何。言甚易也。舍是無難矣。

【穀梁】 不言所歸。歸之善者也。出入不名。以爲不失其國也。歸爲善。自某歸次之。

【公羊譚】 捕らえられて帰ってきた場合には、その名を書く。しかるに曹伯はなぜ名前を書いてないのか、さらになぜ曹国に復歸したことを言わないのか、それはこれが容易だったからである。容易とはどのようなであったのか、公子喜時は当時、曹国にいた。公子喜時が国内にいたらどうして容易なのか、公子喜時は仁徳のひとであった。国内的には国を安定させ、曹伯を待った。対外的には都洛陽で訴えを起し、曹伯の罪を免ぜさせた。経文に「自京師（京師より）」とあるが、それはなぜか。その帰還がきわめて容易であったことを言っているのである。京師からの旅のわずらわしさを除けば何らの苦勞もなかった。

【穀梁譚】 曹伯が帰ってきた場所を言っていないのは、この帰国を善きものとしているからである。曹伯が自国を離れたりまた帰ってきたときに、経文ではその名を記さないのは曹伯が自分の国に対する支配権を失っていないことを表している。ただ（帰る）とだけあるのが最善でこの経文のように、ある場所より帰る、とあるのは次善の表現である。

8 / 16-12 九月晉人執季孫行父舍之于荝丘

【公羊】 執未有言舍之者。此其言舍之何。仁之也。曰。在招邱憐矣。執未有言仁之者。此其言仁之何。代公執也。其代公執柰何。前此者。晉人來乞師而不與。公會晉侯。將執公。季孫行父曰。此臣之罪也。於是執季孫行父。成公將會厲公。會不當期。將執公。季孫行父曰。臣有罪。執其君。子有罪。執其父。此聽失之大者也。今此臣之罪也。舍臣之身而執臣之君。吾恐聽失之爲宗廟羞也。於是執季孫行父。

【穀梁】 執者不舍。而舍。公所也。執者致。而不致。公在也。何其執而辭也。猶存公也。存意。公亦存也。公存也。

【公羊譚】 捕らえられた場合には、これを釈放したとは、経文では言わないのに、ここでは釈放したと言っているのは何故か、捕らえられた人物が仁徳のある人だからである。招邱において捕まっている状態は悲しむべき事柄である。ある人物が捕らえられてその人物が仁徳のある人だと言うことはない。それなのにここでは仁徳の人であると言ったのは何故か、彼は魯公の代わりに捕まったのである。彼が魯公の代わりに捕まったのはどういう経緯なのか、これより前に、晋国の人が魯に来て援軍を要請したが与えなかった。魯公が晋公に出会ったときに晋は魯公を捕らえようとした。季孫行父は言った。「このことは臣である自分の罪です。」そこで季孫行父を捕らえた。魯公は晋の厲公におおうとしたが、その会に魯公は遅れた。そこで、魯公は捕らえられようとした。季孫行父

は言った。「臣たる私に罪があるのに、その国君を捕らえる。これは、子どもに罪があるのにその父を捕まえるようなものである。これは判決の間違ひの大なるものである。これは臣の罪なのに臣の私の身を釈放し臣の君を捕らえる。このような採決上の失敗は国君の先祖代々の御霊の廟を辱めると私は恐れる次第です。」そこで魯公の代わりに季孫行父は捕まったのである。

【穀梁譯】 捕らえられたひとに対して、そのひとが釈放されたことを記載しないのはふつうであるが、ここでは逆に記載してある。それは、季孫行父が成公の身代わりになって捕らえられ、魯国側の必死の釈放運動が成功を収め、晋が季孫行父を成公のいるところで釈放したからである。それ故、季孫行父の行為を高く評価し釈放を記載したのである。

捕らえられたものが釈放されると国へ帰り宗廟でこのことを報告するものであるが、ここではそれが記載されていない。それはここに成公がいたからである。

8 / 16 - 13 冬十月乙亥叔孫僑如出奔齊

8 / 16 - 14 十有二月乙丑季孫行父及晉卻犇盟于扈

8 / 16 - 15 公至自會

8 / 16 - 16 乙酉刺公子偃

【穀梁】 大夫日卒。正也。先刺後名。殺無罪也。

【穀梁譯】 大夫が死んだ場合には、その日付を書くことになっているが、ここではそのことが書いてある。これは、礼の規定に合っている。先に、刺し殺されたことを書き、その後ろに死者の名を書いてあるのは、この殺されたひとが無罪であることを表している。

8 / 17 - 1 十有七年

春衛北宮括帥師侵鄭

8 / 17 - 2 夏公會尹子單子晉侯齊侯宋公衛侯曹伯邾人伐鄭

8 / 17 - 3 六月乙酉同盟于柯陵

【穀梁】柯陵之盟。謀復伐鄭也。

【穀梁譯】柯陵の盟会はもう一度、鄭国を討伐することを謀るためであった。

8 / 17 - 4 秋公至自會

【穀梁】不曰至自伐鄭也。公不周乎伐鄭也。何以知公之不周乎伐鄭。以其以會致也。何以知其盟復伐鄭也。以其後會之人盡盟者也。不周乎伐鄭。則何爲日也。言公之不背柯陵之盟也。

【穀梁譯】経文で成公が盟会から帰国したことだけを記して、鄭を討伐してから帰ってきたとは書いていない。なぜなら、これは、成公は、鄭を討つことに不本意であった。なぜ、公が鄭を討つことに不本意であったことが分かるかという、それは、成公が帰国して祖廟に報告したのは盟会のことだけで鄭を討ったことは報告しなかったからである。その盟会がもう一度鄭を討つことがどうしてわかるか。盟会の後、冬に鄭を討伐したが、これはすべて柯陵の盟に出席したひとたちであったから、このことより、その盟会は、再度、鄭を討つことが分かる。成公は鄭を討つことに不本意だったのにどうして柯陵の盟会の日付を書いたのか。それは、成公は柯陵の盟約に違反せず鄭を討ったことを表している。

8 / 17 - 5 齊高無咎出奔莒